

# 濁流の証言

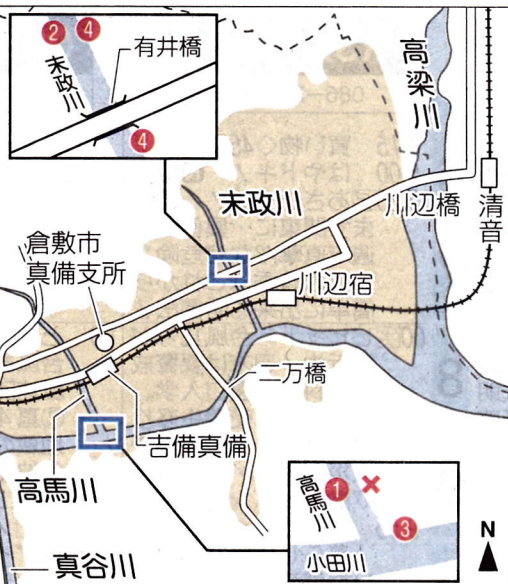
西日本豪雨 倉敷・真備

1面から続く

「水が来るぞー」。降り続く雨の中、声の限りに叫びながら30分ほど離れた自宅へと駆けだしたのを覚えている。6日午後11時半すぎ、会社員須増国生さん(57)＝倉敷市真備町箭田＝は小田川に北方向から注ぐ高馬川の西岸にいた。水位が気掛かりだった。

## ① 決壊 あの日何が

- 主な河川決壊の推定時刻**  
(住民の証言より構成)
- 1 高馬川西岸  
6日午後11時半～7日午前0時
  - 2 末政川上流の西岸  
7日午前0時すぎ
  - 3 小田川の北岸  
7日午前2時～5時
  - 4 末政川上流の東岸、下流の東岸  
7日午前6時半～7時
- ※×は他の決壊箇所



# 深夜から早朝、浸水に時差

不安は当たった。小田川から押し戻されているのか、水が上流の方へ向かっている。そう思つたや否や、堤防を越えた水はのり面の土を削るようにして宅地に向かって流れ出した。自宅を避難所生活の支度を急いで整え、玄関を出ると言葉も失った。押し寄せる濁流に腰まで漬かった。

高さ1・3メートルの門柱の上に逃げたが、すぐのまれた。庭の松に何とかしがみつぎ、助けを待った。消防隊員に救助されるまで約30分。「生きた心地がしなかった」と振り返る。

高馬川は幅5倍程度。西岸に続き、向かいの東岸堤防も決壊が確認された。いずれも小田川との合流部付近だった。小田川の

水位が上がリ、水が流れにくくなって逆流する「バックウオーター現象」が支流で発生して堤防を破断させた可能性が高いと、専門家は指摘している。

## 渦を巻く

地区内4河川8カ所で堤防が決壊した真備町地区。倉敷市は7日午前1時半、高馬川のある北エリアへ避難指示を出したが、住民たちは高馬川西岸と、同じく北方向から小田川につながる末政川の西岸の計2カ所が避難指示以前に決壊していたと証言する。

川幅7倍ほど。末政川の水が逆流して渦を巻く様子を会社員三宅宏始さん(37)＝同町有井＝は目の当たりにした。小田川合流部から500メートルほどの地点だ。ここで西岸の流失を目にした。7日午前0時すぎだったと記憶している。

「日頃は穏やかな『小川』。荒れ狂いだして身震いした」。三宅さんによると、末政川からの濁流を受け、あちこちの民家がきしんだり、ガラスの割れたりする音を響かせ、倒れるように流される家もあった。

地区内を東西に貫き、川幅が200メートル以上ある小田川でも異変が起きた。高馬川との合流部付近で北岸が決壊した。付近の住民たちは、7日午前2時～5時ごろには堤防が破断していたと口をそろえ、当時、浸水深が2メートル以上と一気に達したためだ。

西岸が決壊していた末政川は、東岸も2カ所が流失していたことが7日午前6時半～7時ごろに判明する。目撃したのは、末政川に架かる有井橋たもとのタク

シー会社で代表を務める平井啓之さん(46)＝岡山市北区。直前まで車が行きついていた東岸側の道路が見る見る浸し、川に目をやって気付いた。

6日深夜の高馬川西岸に続き、末政川西岸、小田川北岸から流れ出た水は、真備支所がある地区中心部(末政川以西、小田川以北)を水浸しに。7日早朝の政川東岸の決壊により、濁流は被害を及ぼしていた末政川以東のみ込んだ。

住民たちの証言を突き合わせると、夜から早朝にかけて断続的に堤防が決壊し、時間差で地域に浸水が広がっていたとの推定が浮かび上がってくる。

## 無力感

倉敷市では7日午前10時10分までの時間雨量が267・5ミリに達し、観測上最大を記録した。小田川が接続する梁川の水位は同日、12メートル以上となり、瀬危険水位を初めて超えた。小田川の流れ込みづらくなり、影響は小田川支流の高馬川、末政川にまで及んだ。

玉島消防署予防係の大森啓史さん(37)は当直勤務中の6日深夜から7日昼に、住民からの救助要請を受け続けた。首まで水が迫っている▽△子ども2だけでも助けてほしい▽。浸水区域広範囲に及び、救助に出勤しようにも段がなく、無力感にとらわれた。

「『屋根の上で耐えてください』『助けにいきます』。そう繰り返すしなかった」

(大橋洋平、山本真慈)



決壊した末政川の東岸(中央)。水は普段、有井橋(左)の下をくぐり、手前に向かって流れていた。9日、倉敷市真備町有井